

小林直樹著「暴力の人間学的考察」岩波書店 2011 年 3 月 30 日刊を読む

寛容と連体—— “開いた心” の交りへ

1. (1) 対話を深めて相互の理解と承認が進めば、個人間でも国家間でも、共生の条件が整ってくる。
互いの長所を認めあえれば、それぞれの短所や失敗をも寛容の眼で見て、許しあうことにもなる。寛容の徳は、人間が抱えている弱さや脆さ、悪への傾向にも、互いに “開いた心” で向き合えることを意味する。
(2) お互いの欠陥ばかりでなく、人生そのものの脆さ・短かさに思いを至せば、寛容は更に深く・広くなり、心はそれとともに、自他を越えた世界に向って “開かれ” ていくだろう。
(3) 人々の心のその展開は、今日ではとりわけ地球という我々の住み家の奇跡性と有限性の認識によって、一段と深まるであろう。
(4) 大量の水を持ち、太陽から適宜な距離を保ってエネルギーを与えられ、生物を生み育てた奇蹟の星、地球。きれいで豊かだが、銀河系の中でもめだたない小っぽけな惑星 “宇宙船地球号”。人類の増加で一杯になりつつある、かけがえのない有限な地球。この脚下の星の有難さと小ささを思えば、そこに育てられた人間は、それを汚染し・破壊する愚行を恥じないではいられないであろう。
(5) 更にこの小惑星の上で、血を流して闘争し合う醜悪さを顧みて、我々を在らしめた大いなるものに深く首を垂れ・謝する外ないであろう。
(6) 現代人はこの反省を共有し、そこから「かけがえのない地球」 ("Only One Earth") を回生し、その上での争いのない共生をはぐくむことを、これからの大きな課題とすべきではないか。
2. (1) 大自然における人間の地位にも関するこの認識に至れば、我々は互いの承認→寛容から更に一步を進め、共通の世界課題の解決に向けて、力を併せてとり組む連帯あるいは相互扶助の境地に互いを高めていくことができるであろう。
(2) それによって、一人ではなしえない大きな仕事も、皆で成しとげることができるようになる。
(3) これらの観念は、いずれも新しいものではない。相互扶助 (mutual aid) はとくに P・A・クロポトキンが唱え、連帯 (solidarity) は E・デュルケームらが、キィ・コンセプトとして強調していた、古典的ともいえる古い観念である。
(4) しかしそれらは今日、このかけがえのない地球上に生きる人間同胞の再確認を踏まえて、新たにグローバルな意義を吹きこんで再生していくべき基本的な理念である。
3. (1) 今日の人類が当面する深刻な “世界問題” を解決し、進んで現代の大転換期を切り抜け、世界共同体を形成するには、この地球認識に基く実践が必要である。

(2) この理念の実行は恐らく、ゲーテのファウストが斃^{たお}れる直前に、「自由な土地に自由な民と共に住みたい」といって、その土地を拓くのに「大胆で勤勉な人民」が「協同の精神」で働く様相^{さま}を語った、あの光景に似ることになるかもしれない。

(3) 大切な地球を守り、それを「自由な土地」にして暴力をなくすことは、「勤勉な人民」の真摯な協同＝連帯によって始めて達成されるだろう。

(4) そしてその時には、斃れたファウストの霊に向って天使たちが謳った言葉の中の、次の一節が思い出されるであろう。「絶えず努め励む者を、われらは救うことができる。」("Wer immer strebend sich bemüht Den können wir erlosen" 相良守峯訳による)

(5) いや、天使のそうした救いの声が聞かれなくとも、為すべきことに協働しようという方が、我々人間にはふさわしいというべきか。

4. 矛盾にみちた人間も、このような可能性を持つがゆえに、開かれた世界の創造を期待できると思う。

P312

<コメント>

憲法の教科書「憲法講義(上・下)」の著者で、法哲学、憲法学者である小林直樹先生の「暴力の人間学的考察」。テロや大量殺戮の現状を眼にして、人類はどのように対処したらよいか。本書を通して考えたい。

— 2016年7月2日(土) 林 明夫記 —